ファイナルファンタジー　～ジュエルと謎の妖精～

神姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ファイナルファンタジー　～ジュエルと謎の妖精～

【Ｎコード】
Ｎ７６８８Ｇ

【作者名】
神姫

【あらすじ】
ファイナルファンタジーが大好きなので、ファンフィクションとして出させてもらいます！！楽しみにしていてください！！

おとな（前書き）

登場人物

・ウォーレス

・ノエル

・ココヤシ

・デイバー

などなど…。

話が進んでいくとまた登場します！

おとな

俺はウォーレス。ココヤシ村の住人だ。
ココヤシ村は、個性的な人が約２０人暮らしている。
とても小さな村だが、空気はおいしくて、周りも優しい人達ばかりで
俺はここが好きだ。

今日、俺は１６歳になった。ココヤシ村では、１６歳からが成人で、
必ず、あることをしなければならない。

「ウォーレス。誕生日おめでとう。今日から、お前は大人の仲間入
りをしたんだ。
これから、恒例、あれをやってもらうぞ。準備は良いな？」

村長のココヤシだ。あ、ちなみに村の名前は村長の名前から付けた
んだ。

「わかっています。村長。」

あること…。それは…。

”魔物と戦い、宝石を奪うこと。”だ。

奪うという言葉はふさわしいとは思わないが…。ま、おいといて。
宝石とは、ルビー、サファイア、ダイヤモンド、エメラルド等はも
ちろん、
金、銀、プラチナなどの鉱石も含まれるそうだ。

「いいか、ウォーレス。森の奥に、宝石の集まる
ジュエルという名の場所がある。そこに、ノエルが居るはず。
しかし、そこに行くためには沢山の魔物と出会うと思う。
逃げたいなら逃げても良い。勇気を出して戦っても良い。
お前の自由だ。それを決めるのも大人になるための試練だ。
そして…。奥にはいる手前に、大きな魔物が眠っている。
そいつと戦わなければ、ノエルには会えない。
魔物に勝って、ノエルから、何かの宝石をもらい、戻ってくるのだ。
それから、大人になった儀式を行う。」

「わかっています。俺は大人にならなければならない。」

「そうじゃ。そのいきじゃ。わしらは見守ることしかできないが、
健闘を祈る。さあ、みなのもの！！ウォーレスが森へ向かうぞ！！」

「ウォーレス、がんばるんだよ！！」
「お兄ちゃん、がんばってねー！」
「ウォーレス、大人になって帰ってこい！！」

「ありがとう！俺はがんばって大人になって帰ってきます！！」

俺は、そういって森へ向かった。

俺は戦う！！

森の中はしめっていて薄暗い。
昨日は雨だったから余計にそう思うのかもしれない。
いつもは薄暗いっちゃあ薄暗いけど、爽やかで気持ちが良い。
小鳥のさえずりも聞こえるし、木の葉が落ちてきたり、風で揺れる葉を見るのが好きだった。

「いつもの道で良いんだな。」

俺は俺を励ましながら進んだ。
いつも遊んでいるから、道はだいたい覚えている。
しかし、いつもは魔物が出ないように封印をしているが、
こんな儀式の時だけ封印を解くのだ。
だから、戦ったりしながら進むしかない。

「うわぁ、またか！」

俺は何度も出てくる魔物と戦い、奥へと進む。

「ん、これは…。」

俺は、キラキラと光っているジュエル…ではなく、ネックレスを拾った。

「光っている…。こんなの見たこと無いぜ…。」

俺は、帰ってきたらココヤシ村長に見せてみようと思った。

「村長なら、何か知ってるよな！！」

「ここは…。ん、何々？この鍵をさして、奥へ進んでください。
＊注意＊ここは大きな魔物が出ます。大人になるための儀式を行っている方以外は
ここへは絶対入らないでください。ただし、封印をすれば入ることができます。」

俺は底に落ちていた鍵を拾い、鍵を開けて奥へと進んだ。
入ったときには違和感があった。
しめっていて薄暗くなく、からっとしていて明るいのだ。
そして、俺達の村を一回り小さくしたくらいの広さがある。

魔物は……？

辺りを見回すが、何もない。
しかし、あるところで花が動いている。
虹色に変化する奇妙な花は、魔物以外にあるわけない。

「誰だ…。」

この聞いていて気持ち悪い声は…。魔物に違いない。」

「お前が俺のために遊びに来たのか～…。あはは、えさが１００万年ぶりに来たぞ～！！」

えさが１００万年ぶり？まさか、俺が大人になるための儀式でここに居ることを知らないな。
普通は魔物はそういうことは知っていると思っていた。

魔物の名は「ネージェー」。

俺は、こいつを倒さなければならない。

「そこの若いヤツ…。お前は俺のえさだからなあ～…。暴れられちゃ困るよ…。」

「そんなこと、知らない！俺は大人になるんだ！！お前を倒す！！」

「なぁにぃ…？俺を倒すと言うのか…。まぁ良い。倒せる物なら倒してみろぉ！！！！！」

そういって、ネージェーは襲いかかってきた！！

「…。俺は戦う！大人になるために！」

俺は強いんだ！

「いくぞ！ネージェー！俺はお前を倒し、大人になるんだぁぁ！！！！」

「俺を倒すことは子供のお前には不可能だ…。ぐぁっ！」

ネージェーが油断をした隙に俺はヤツの弱点、腹をねらった。

「良いか、ウォーレス。ボスの名はネージェーといってな、見た目はコブラみたいな牛みたいな奇妙な魔物なのじゃが、弱点は腹だ。腹をねらうと良い。しかし…。ヤツは魔法を使ってくる。それに当たればお前は、多分勝てんだろう。気をつけながら戦うんじゃ。ちなみに魔法を出させないようにすることができる。森の中で、光るネックレスがあるはずじゃ。それを拾うと良い。」

ココヤシ村長の言ってたネックレスとは…。

俺はバックの中に手を伸ばす。そして、ジャラ…と音を立てて、俺の手の中に収まっていた。

「あった！」

「ぐ、お前…。何故それを…。」

「森の中で拾ったんだ！！」

俺は、それを身につける。
これで、ネージェーは魔法を使ってこない。

俺は、弱点の腹をねらいまくった。
やつは「ぐあぁ。」
としか言わない。
きっと、魔法だけしか使えない魔物だろう。
いける！！

「くらえ！でやぁぁ！！」

「ぐわーーーーー！！」

そういって、ネージェーは倒れた。そして、どんどん消えていく。
消えたあとは、赤い宝石、ルビーが落ちていた。

「よし、ノエルに会わないと。」

俺は、ネージェーが消えたあとに開いた門を通り抜けた。

感謝感謝

「あら、ウォーレス。意外と早かったのね。」

「ノエル。意外は余計だ。」

「ゴメンゴメン。ウォーレスが森に入ったところからずっとみてたの。
子供にしてはやるなって思ったわ。」

「ネージェーを倒したから、俺はもう大人だろ??」

「ええ、でも儀式を終えるまでは子供。子供をまだ楽しめば?」

ノエルに会った。ノエルとは幼馴染だけど、２４歳なので俺より８歳も年上だ。
しかし、ノエルは年をとっていない。
ノエルは、この森の守り神なのだ。この泉でこの村とこの森を見守ってくれている。

「さあ、ウォーレス。このダイヤモンドを受け取りなさい。」

俺はノエルからダイヤモンドをもらった。

「ウォーレス、あとは儀式を行うだけ。戻るわよ!」

ノエルは俺の手を取り、ものすごい早さで村に戻った。

「おお、ウォーレス！無事だったか！」

「ウォーレス兄ちゃん！」

「ウォーレス…。良かった…。」

村では、みんなが俺を待ってくれていた。

「俺、無事に戻ってきたぜ！」

「ええ、ウォーレスは強かったわよ。」

それから、儀式を行った。

「村の者。ウォーレスが無事に戻ってきたことに感謝し、
そして、ウォーレスが大人になったことを祝おうじゃないか！」

「ウォーレス、あなたのための儀式なんだから。なにかいいなさいよ。」

「え、なにかって何を言えば良いんだか…。」

「なんでも良いのよ！！感想を言えば！」

「みなさーん、ここで、ウォーレスの感想発表です！」

「えー。」

「いいから言いなさい！！！」

ノエルはキッと俺を睨む。
さすがに怖かったので、感想を言うことにした。

「え、お、俺は、森にはいるときすごく緊張しました。
魔物の強さとかより、大人になれるかどうかが心配で、
自分を信用しきれなかったのが心残りだけど、
今、こうしてここに入れることを自分と、ノエルと、
村のみんなに感謝の気持ちでいっぱい！
みんなありがとう！」

ノエルと村長の会話

成人の儀式を終えて、疲れた俺はベッドで寝てしまっていたらしい。

「ノエルよ、ウォーレスはしっかりやっとったかの？」

「ええ、男らしく立派でした。」

「そうか…。それにしても、この村から、子供という存在がいなくなったのう。」

「それが心残りですか…。ココヤシ村長…。」

「ああ、寂しいのう…。」

「あ、ココヤシ村長。ウォーレスったら、顔が笑ってますよ…。」

「おぉ、ウォーレスもこんなにおおきくなったんかのう…。」

「ええ、１６年というのは、こんなにも短いものでしたか…。」

「しかし…。不安じゃ…。わしらはもう年をとらんが、ウォーレスはのう…。」

「大丈夫ですよ。ウォーレスなら、私達が居なくなっても、しっかりやっていけますよ。」

「わしらは、いつ消えてもおかしくないからのう…。」

「ココヤシ村長、ウォーレスが寝ているとはいえ、そんなこと本人の前では
言わないでくださいね。」
「おお、そうじゃった。もう不安で不安でのう…。」
「さ、ココヤシ村長。きっと疲れてるんですよ。寝ましょう。」
「そうじゃな。わしもつかれたしの。ノエル、明日からもまた頼む。」
「ええ、お休みなさい。」
俺は、目が覚めた。
「ふわぁ。あれ、俺寝ちゃってたのか。」
俺は、目が覚めてしまい眠れなかった。
「ちょっと外の空気すうか。」
俺は外に出ると、いつもと雰囲気が違うことに気づいた。
「なんだ、この生ぬるさ…。」
それと、怪しい光が、近所の子供（？）、リリアの家を指している。
「リリアの家からだ。いってみよう。」
俺は大人になった。もし、リリアとその家族に何かあったら、

助けてあげなくちゃいけない。」

いなくなった村人達

「リリア！大丈夫か！？」

俺は、ドアをばあんと開け、リリアの家に入った。

「なんだ、この空気…。」

家の中は、生ぬるい空気と共に、赤い光で周りがよく見えない。
それと、リリア達の姿もない。

「リリア！おばさん！おじさん！どこにいるんだ？返事をしろ！！」

「ちょっと、どうしたの、ウォーレス！」

「その声はノエルか？俺にもさっぱりわかんねえんだよ。」

やがて、霧のような赤い光は消えていった。
晴れたとき、やっとノエルの姿が見えた。

「ノエル、お前どうしてここに…。」

「ウォーレスこそ、大きな声を出してなにかと思ったわよ！」

「リリアたちの姿がない…。」

「リリアた…ち…。」

そのとき、ノエルが倒れた。

「ぉ、おい、ノエル、お前なんだよ！」
やばい…。なんなんだ…。
「ノエル、今から外に出るから、しっかりつかまれ…。」
俺は、ノエルをおんぶして、外に出た。
「なんだったんだ…。」
俺は、ノエルをベッドに眠らせた。
「なんなんだよ、本当に…。」
そのとき、すごく眩しい白い光が流れ込んできた。
「うわあ！！」
俺は、このままどうなるのだろう。
今日大人になったばかりなのに…。

「うふふ、だいぶお困りのようね。」
俺は寝ている…。はずだ。
目の前に、見たこと無い格好の女の人が立っている。
「私だ。ノエルだ。すまない、ウォーレス。私は、本当は、ノエルじゃないのだ。」

「ノエル…。じゃない。じゃあお前は誰だ。」

「私の名はオールゴッド。すべての神という意味だ。私は…、私は、不死の身となり、今まで５０００年。ずっとここで一人だったのだ。」

「…。」

「そして、１６年前に、お前と出会った。お前は…。」

「俺が…。なんなんだ？」

「いや、今は教えられない。それより、ウォーレス。リリア達は、今、暗黒の世界に投げ込まれている。」

「な、何だって！？」

「暗黒の世界と言っても、すぐそこの遺跡にある。今、そこは魔物達に占領されて、だれも近づけないよう、バリアをはっているから、今そこに行ける者はいないのだよ。」

「俺は…？俺は行けないのか？」

「立派な大人になったな。ウォーレス。お前は行ける。昨日渡した、ダイヤを持っているかね？」

「お、おう、これだな。」

「よし、それでは、今すぐ、昨日の泉に行くぞ。」

封印された妖精

「はっ…。」

「な、何故だ！」

「ジュエルが…。」

「すまぬ。ウォーレス…。どうやら、さっきのレーザー光線のようなものがでていたとき、ジュエルも一緒に砕かれてしまっていたのだ…。」

「え、じゃあ、どうなるんだ…？」

「心配ない。今から私がジュエルを作る。ウォーレス、手伝ってくれないか。」

「おう、何でもするぜ。」

「すまんな。…。『闇に溺れし魔の月よ。天に浮かびし神の魂。我がココヤシ村の聖なる泉…。奇跡を起こせよ…。そして美しき神なるオールゴッドが。すべての神における我出し。ここにジュエルを生み出せよ…。』」

「な、なんだ…。」

ノエル…、じゃなくて、オールゴッドの不思議な呪文により、ジュエルが作られていく。

そして、七色に輝きながら、どんどんどんどん大きくなっていく。

「でやーーーー！」

ものすごい聖なる轟音と共に、ジュエルが眩しく輝き始めた。

俺は、目をつぶった。…しばらくして、目を開けた。

目の前には、虹色に輝くいつものジュエルがあった。

しかし、オールゴッドは、遠目をしている。

「オールゴッド？どうしたんだ？」

「すまない。ウォーレス、私のことは今まで通り、ノエルと呼んでくれないか。」

「え、別に良いけど。」

「今、ジュエルを改めて作った。しかし…。今ので、今まで隠していた

妖精…、七色の妖精が…。封印が解かれてしまったんだ。」

「え、どういうことだ…。」

「このままでは…。妖精がもし、悪いヤツに見つかってしまったら、ジュエルをクリスタルに召喚されてしまう。」

「そしたら…。どうなるんだ？」

「ウィーレス…。お前の叔父だ。叔父が…ねらっているんだよ。

もし、クリスタルに召喚されてしまったら…。
この世界は、あいつに操られ、滅びてしまうだろう。
そこでだ、ウォーレス。ウィーレスはお前の叔父だ。
しかし、１５００年前、不死の薬を研究していたウィーレスは、
完成した不死の薬を、試しに飲んでみたのだよ。
それから…。」

「不死になったんだね。」

「そういうことだ。私とウィーレスは会うことができないのだ。
やつが、悪さで、私にＳ極の磁石を貼り付けられたのだ。
やつは、Ｎ極の磁石を身につけ、私を近づけないようにしている。
ヤツにとられたらのことを考えると…。身がもたん。
だから…。ウォーレス！やつに七色の妖精を奪われる前に、
妖精を再度封印してくれないか？
一人で行けとは言わない。ギルドに、強い勇士を
協力してもらっている。
そこにいって、やつらの説明を聞くと良い。もう、お前が眠っている
ウチに
いっておいたから、心配するな。」

「…。わかった。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7688g/

ファイナルファンタジー　～ジュエルと謎の妖精～

2010年10月15日23時35分発行